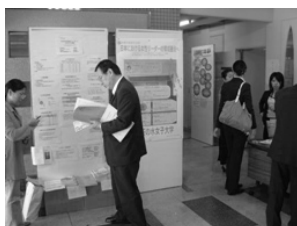
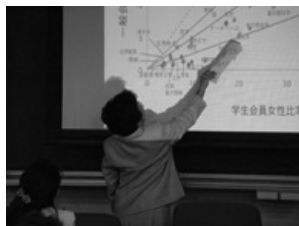


男女共同参画学協会連絡会 第3回シンポジウム報告書 - 21世紀の産業を拓く男女共同参画社会 -



日時:2005年10月6日(金)

場所:お茶の水女子大学 理学部3号館

男女共同参画学協会連絡会・第3回シンポジウム報告書 目次

第3回シンポジウム広報用ポスター	1
詳細プログラム	2
1. シンポジウム詳細報告	
(午前の部より)	
1-1 テーマ討論「産業界における女性の研究者・技術者を増やすために」のまとめ	3
(午後の部より)	
1-2 主催者挨拶発言要旨 村井眞二氏(日本化学会会長)	4
1-3 来賓挨拶・発言要旨	
1-3-1 鈴木正人氏(日本経済団体連合会 常務理事)	5
1-3-2 丸山剛司氏(文部科学省 科学技術・学術政策局長)	5
1-3-3 荒木由季子氏(経済産業省 資源エネルギー庁新エネルギー対策課課長)	7
1-4 歓迎の辞・発言要旨 郷 通子氏(お茶の水女子大学学長)	9
1-5 特別講演・講演要旨	
1-5-1 全体報告	11
1-5-2 長沼雅子氏((株)資生堂 R&D 企画部学術室)	12
テーマ:「働き続けられる職場から、ともに働きやすい職場へ」	
1-5-3 塩満典子氏(内閣府男女共同参画局)	13
テーマ:「科学技術分野における男女共同参画～行政の立場から」	
1-5-4 小箆香椎子氏(日本女子大)	14
テーマ:「多様な理工系女性の育成 男女共同参画推進と大学の役割」	
1-6 パネル討論「産・官・学・男・女 - 真の共同参画社会を目指して」のまとめ	15
1-7 連絡会活動報告 相馬芳枝氏(男女共同参画学協会連絡会委員長)	16
1-8 閉会挨拶・発言要旨 芹澤昭示氏(日本原子力学会会長)	18
1-9 ポスター発表写真集及びポスター賞	19
1-10 懇親会・写真集	20
2. 第3回シンポジウムWGメンバー	21

男女共同参画学協会連絡会・第三回シンポジウム

21世紀の産業を拓く男女共同参画社会

日時： 2005年10月7日(金)

場所： お茶の水女子大学・理学部3号館

(最寄駅)地下鉄 丸の内線茗荷谷駅、有楽町線護国寺駅

資料費： 1,000円(学生200円)

定員： 200名、当日参加も歓迎

プログラム

テーマ討論 10:00～12:00

「産業界における女性の研究者・技術者を増やすために」

オーガナイザー 森義仁氏 (日本化学会)

全体会 13:00～17:30

主催者挨拶 村井眞二氏 (日本化学会会長)

来賓挨拶 鈴木正人氏 (日本経済団体連合会 常務理事)

丸山剛司氏 (文部科学省 科学技術・学術政策局長)

荒木由季子氏 (経済産業省 資源エネルギー庁新エネルギー対策課課長)

歓迎の辞 郷 通子氏 (お茶の水女子大学学長)

特別講演 13:25～14:55

長沼雅子氏(資生堂)「働き続けられる職場から、ともに働きやすい職場へ」

塩満典子氏(内閣府男女共同参画局)「科学技術分野における男女共同参画～行政の立場から」

小館香椎子氏(日本女子大)「多様な理工系女性の育成 - 男女共同参画推進と大学の役割 - 」

休憩 14:55～15:10

パネル討論 15:10～16:30

「産・官・学・男・女 - 真の共同参画社会を目指して」

司会： 井上祥平氏 (東京理科大学)

パネリスト： 浅川智恵子氏(日本IBM)、辻 篤子氏(朝日新聞)、
館 かおる氏(お茶の水女子大学 ジェンダー研究センター)

報告・ポスター賞発表・挨拶 16:30～17:40

連絡会活動報告 相馬芳枝委員長

新規加盟学協会会長挨拶

テーマ討論報告

ポスター賞の発表

次期幹事学会挨拶 花岡文雄氏 (日本分子生物学会会長)

閉会挨拶 芹沢昭示氏 (日本原子力学会会長)

ポスター展示
受付フロアにて

懇親会

18:00～19:30

懇親会費： 2,000円

主催：男女共同参画学協会連絡会 <http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>

後援：日本学術会議、文部科学省

申込先・問合せ先：(社)日本化学会 男女共同参画係 電話 03-3292-6168 Email danjo@chemistry.or.jp
保育室：ご希望の方は上記にお問い合わせください。

男女共同参画学協会連絡会・第3回シンポジウム詳細プログラム

10:00～12:00 テーマ討論「産業界における女性の研究者・技術者を増やすために」
オーガナイザー 森義仁氏（日本化学会）

受付フロアにてポスター展示

(13:00～17:40 全体会)

1. 主催者挨拶 村井眞二氏（日本化学会会長）
2. 来賓挨拶 鈴木正人氏（日本経済団体連合会 常務理事）
丸山剛司氏（文部科学省 科学技術・学術政策局長）
荒木由季子氏（経済産業省 資源エネルギー庁新エネルギー対策課課長）

3. 歓迎の辞 郷 通子氏（お茶の水女子大学学長）

4. 特別講演

長沼雅子氏（資生堂）
「働き続けられる職場から、ともに働きやすい職場へ」
塩満典子氏（内閣府男女共同参画局）
「科学技術分野における男女共同参画～行政の立場から」
小館香椎子氏（日本女子大）
「多様な理工系女性の育成 - 男女共同参画推進と大学の役割 - 」

5. パネル討論「産・官・学・男・女 - 真の共同参画社会を目指して」

司会：井上祥平氏（東京理科大学）
パネリスト：浅川智恵子氏（日本IBM）
辻 篤子氏（朝日新聞）
館 かおる氏（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター）

6. 連絡会活動報告 相馬芳枝委員長

7. 新規加盟学協会会長挨拶	日本神経科学学会	小幡邦彦氏
	土木学会	三谷浩氏
	日本植物学会	和田正三氏
	日本バイオイメージング学会	鈴木和男氏
	地球電磁気・地球惑星圏学会	本蔵義守氏
	石油学会	岡部敬一郎氏
	日本糖質学会	長谷純宏氏

8. テーマ討論報告

9. ポスター賞の発表

10. 次期幹事学会挨拶 花岡文雄氏（日本分子生物学会会長）

11. 閉会挨拶 芹沢昭示氏（日本原子力学会会長）

18:00～

懇親会

1-1 テーマ討論「産業界における女性の研究者・技術者を増やすために」 のまとめ

本テーマ討論は日本化学会の森 義仁氏をオーガナイザーとして行われ、会場はほぼ満員となった。写真 1-1 に森氏による進行の様子を示す。まずオーガナイザーの森氏から本テーマ討論会を趣旨説明、アンケート記入及び討論の手順で行う事が説明された。なお、アンケート項目は以下の通りである。

- (1)産業界における女性の研究者・技術者が少ないことによる影響
- (2)女性の研究者・技術者が少ないことの理由
- (3)女性研究者・技術者が増えることにより期待されること
- (4)増やすための方法
- (5)まとめ



写真 1-1 森 義仁氏による
テーマ討論進行の様子

まず、森氏によって行われた趣旨説明の中では、科学史の研究から男女共同参画に係わるようになった自身の経緯が話され、そして、以下の点を中心とした日本と世界の女性研究者・技術者の現状について統計資料を用いた紹介があった。

- ・日本の高齢化は急速に進みつつあること
- ・日本の女性の労働人口を示したグラフに見られる 30 歳代から 40 歳代の部分がくぼんだ M 字形のパターンは先進国の中では日本独特なこと
- ・国勢調査の結果を見る限り日本では専門技術職に就く女性の数は急増しているが、主な分野は保健・農学であって、その他の分野では横ばい状態である

このような本テーマ討論の趣旨説明が行われた後、参加者全員によるアンケート記入を行った。写真 1-2 に会場でのアンケート記入の様子を示す。そして、アンケート記入及び用紙の回収後、前述のアンケート項目に従って、討論が進められた。

アンケート項目(1)の「産業界における女性の研究者・技術者が少ないことによる影響」について討論では、

- ・戦力が少ないまたは埋もれている
 - ・多様性に欠ける
 - ・女性の登用で新しい観点が見出せる
- 等の意見が会場より出された。

また、アンケート項目(3)の「女性研究者・技術者が増えることにより期待されること」についての討論では、

- ・女性採用はイメージアップにつながる
- ・職場の雰囲気明るくなる
- ・男性の生活体制(衣食)にも影響を与える
- ・女性の頑張る意識が社会全体にも影響を与える
- ・女性の結婚後、特に出産後に職場でのリスクが発生する
- ・女性の結婚や出産が職場でのリスク要因にならないためには多様な生き方が可能な社会が必要だが、なにより男性が変わる必要がある
- ・今まで「男性が変わる」といった議論があっただろうか
- ・仕事をしつつ育児も家事もこなすという夫の在りようは、夫の母親が自分の息子をどう育てたかによる

、等の意見が会場より出された。

更にどうしたら女性研究者・技術者を増やせるかについての討論が行われた。その中では、

- ・個人の努力に期待するには限度がある
- ・現場では当然利益が優先されるため、トップダウン方式で数値目標を示しての努力も必要。

、等の意見が出された。

時間の制限で討論全体のまとめを行うことはできなかったが、多くの参加者により活発な意見交換がなされるテーマ討論となった。



写真 1-2 参加者全員による
アンケート記入の様子

1 - 2 主催者挨拶・発言要旨 村井眞二氏（日本化学会会長）



写真 1-3 村井眞二氏
（日本化学会会長）

みなさんこんにちは。主催者として大変僣越です、また光栄でございます、ご挨拶申し上げます。

今、日本化学会の会長をしております村井です（写真 1-3）。日本原子力学会とともに主催させていただいております。

世の中に大きな流れが出てきていると思います。非常に活動が目に見えるようになり、活発になり、この時期に主催させていただくことは大変光栄でございます。ご承知の通り、男女共同参画学協会連絡会は自然科学系の多くの学協会が、応物学会、日本物理学会、日本化学会の呼びかけに応じて、平成14年に集まられました。一年して第1回シンポジウム、2年目に第2回シンポジウム、そして今年が第3回シンポジウム。その誕生日の10月7日をシンポジウムの日と決めて、毎年開催してきました。来年の10月7日はカレンダーをみましたら土曜日です。そのうち日曜日

も来るんじゃないかと思えます。第1回と第2回は記念シンポジウムというように記念と言う言葉がついておりますが、今回は第3回シンポジウムと言う風にさりとしています。これは、この活動が大変成熟してきたことを物語っていると思えます。第1回は「男女がともに生きる社会へ」ということをテーマに、また第2回は「多様化する科学技術研究者の理想像」ということで、大掛かりな学協会のアンケートをなさいまして、それを中心に、で、今回は産業界における技術者・研究者また、科学の仕事を目指す学生にも視野を広げようという趣旨のシンポジウムでございます。数々の活動をこの学協会連絡会を中心にして行って来られており、また、着々たる成果を上げておられます。例えば、平成16年3月に提言を発表されておられますが、それをうけて「どこまで進んだ男女共同参画」という集まりがございまして、そのサマリーが「学術の動向」の最近号に非常に詳しく載っておるところでございます。

今日丸山局長にご出席いただいておりますが、文部科学省の方からは本年の概算要求で男女共同参画に関する新規要求を2点含めていただいております。後ほど重複するかもしれませんが、一つは、女性研究者の活躍推進のため、出産育児等による研究中断からの復帰支援のため2億2千8百万円を、また、さらに2つ目は、科学技術分野で活躍する女性研究者のロールモデルを示したり、シンポジウムを開催するために、4千7百万円を、新規要求されております。大変ありがたいことでございます。今回主催させていただきます日本化学会から、2点報告させていただきます。3年前にこの連絡会を受けまして、日本化学会でもこの趣旨の協議会が形成されました。委員長は相馬先生でございます。その中で日本化学会にいくつかの要望を出されまして、そのうちの一つ、日本化学会に理事が20人居るのですが、その理事の中の一つを女性枠ということを要求され、決定されました。本年のはじめのころに、女性枠としての初めての代議委員会の選挙が行われ、千葉大学の西川先生が初めての理事になっておられます。私たち日本化学会としては、女性枠として理事を確保できたことは一つのマイルストーンなのでありますが、これを国際的に見れば、そこまでしないと女性の座布団を確保できない、ということになって、いみじくも3月ごろのタイム誌にそのことがズバリ指摘されております。伝統ある日本化学会が、理事枠を確保しなきゃならないほど日本はこういう状態である、という趣旨の記事が載っています。これは私も香港にいるタイムズの記者から電話インタビューを受けて、話をしたことです。このタイム誌の号というのは、MITの物議を醸した件に関する特集記事でございました。今回は産業界における女性ということですが、3週間ほど前のタイム誌でやはり特集記事がございまして、日本のこれからにとって女性は大変必要であるのに、日本から女性というのは見えない、というかなり大部な特集記事がございまして、そういうことで、理事に関しては、日本化学会は一ツアクションが起こりました。

もう一つ、化学関係で、IUPAC という、国際純粋・応用化学会議という大きな団体がございます。物理学関係で IUPAP というのと全く同じでございます。その次期会長に早稲田大学の松本和子先

生が今年の夏、北京で選出されました。70数年の伝統のあるこの国際連合的な化学の会議で初めての女性の会長に就任する予定でございます。私たちとしても、支援していきたいと思っております。今日はそういうテーマもございますし、日本経団連の常務理事の鈴木様、文科省の丸山局長、経産省の荒木課長、大変ご多忙のところご出席いただきまして、厚く御礼申し上げます。また、本会場を快くお貸しいただきましたお茶ノ水大学様に感謝申し上げ、郷先生に感謝を申し上げたいと思います。どうか、実り有る一日を過ごされること、またこれが先々さらに大きく実ってくることを期待いたしまして、主催者の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

1-3 来賓挨拶・発言要旨

1-3-1 鈴木正人氏（日本経済団体連合会 常務理事）



ご紹介いただきました日本経団連の鈴木と申します（写真 1-4）。いつも皆様方には、大変、いろいろな分野でご協力、またご寄託いただいておりますことを厚く御礼申し上げたいと存じます。本日は男女共同参画学協会の第3回シンポジウムと伺っておりますけれど、多数の方々ご参加されて、盛大な形で開かれますことを、まずは心からお喜び申し上げたいと存じております。

改めて申し上げるまでも無いことではございますが、わが国の社会経済情勢というもの急激にかつ大きく変貌を遂げているわけではございます。そうした中で、男女が互いにその立場を尊重しつつ、かつ責任を分かち合って性別に関わらず個性や能力を存分に発揮していく社会を実現する、

写真 1-4 鈴木正人氏
（日本経済団体連合会常務理事）

これはわが国にとりまして喫緊の課題であるというように認識をいたしております。99年の6月には男女共同参画社会基本法というものが制定されましたが、これは皆様よくご存知の通りでございます。私も日本経団連におきまして、経営をとりまく環境というものが、日々大きく変わっておりますが、企業が存続していくためにも、性別や年齢等にこだわることなく、多様で能力の高い人材を活かしていく、個人それぞれが持つ強みとか、持ち味を十分に活用していくということが一段と重要である、という観点から、男女共同参画の必要性を強く認識しておりますし、同時に会員企業をはじめ広く社会に訴えているところでございます。男女共同参画学協会連絡会におかれましては、理工学系の学協会がお集まりになりまして、科学技術の分野におきまして、男女が共に、個性、また能力を存分に発揮できる環境の実現、そしてネットワーク作りを真に取り組まれている、そのように伺っております。是非ともこの連絡会の力強い牽引力のもとに科学技術分野における男女共同参画というものが一段と促進されまして、そこから大きな成果、また高い業績が生まれてくることを大いに期待したい、と存じております。

最後になりましたが、ご参加の皆様方の今後ますますのご活躍とご健勝を祈念申し上げまして、簡単ではございますが、お祝いのご挨拶とさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。

1-3-2 丸山剛司氏（文部科学省 科学技術・学術政策局長）

みなさまこんにちは。ただいまご紹介いただきました、文部科学省の科学技術学術政策局長をしております丸山でございます（写真 1-5）。今日は私、生まれて初めて女子大というところに来て、個人的に男女共同参画ができたな、と思って、大変喜んでおる次第でございます。先ほど村井先生の方からご紹介有りましたとおり、この男女共同参画学協会連絡会のシンポジウム、3回を迎えられたとい



写真 1-5 丸山剛司氏
(文部科学省 科学技術・学術製作局長)

うことで、これまでの関係者の皆様の活動、ご苦労に対して深く感謝申し上げます。ご案内のように、科学技術の分野における男女共同参画の推進と言う問題は、それぞれの分野ごとに色々な事情を抱えておりまして、議論の集約が難しい点もありますけども、そういうことを乗り越えて、男女共同参画学協会連絡会の活動というものが、共通の問題意識というものを取りまとめて、いろいろな提言、あるいはシンポジウムを開催、更には女子高校生の夏の学校というような精力的な活動を行っておられることを高く、私ども評価しております。ご案内のように、現在国際的な知の大競争時代という中で、いよいよ本格的な人口減少を迎える日本にとりまして、科学技術

を担う人材というものは非常に重要でございます。

これが、科学技術創造立国の長期的な礎と言っても過言ではないと思います。そういう中で、わが国は女性の活躍という点で、諸外国に比べて非常に遅れをとっていて、この問題にはすぐに取り組みなければならないと言う風に認識をしております。研究者の単に数という問題ではなくて、わが国の研究開発を活性化するためにも、女性と男性が同じ職場で、共に能力を発揮できるような環境を作る。これが非常に重要ではないかと思っております。そういったことを考えます時に、男子に比べて理工系を志す女子生徒、年代が若い方にもそういう方が少ないということも大きな問題でございます。こういう問題意識の下で、先ほど村井先生からご紹介がありました、来年度に向けまして、3つの概算要求をしております。

一つは、科学技術の分野を目指す女子学生や生徒の進路選択の支援ということで、具体的には、女性研究者と学生や生徒との交流の機会を作って、ああいう人になりたいな、という志を持つ人が少しでも増えるような政策、これをやっていきたい。これが一点目でございます。

それから2番目はもっと大きな構造的な問題ですけれども、出産・育児と言う問題に直面したときに、どうしても研究を中断させざるを得ない、というようなことがありますけども、それを、復帰を容易にするような支援策を講ずる、ということで、これは今日本学術振興会の予算ということで、考えております。

それから、3点目はさきほどご紹介がありませんでしたけれども、私どもの文部科学省にあります、科学技術振興調整費というものを使いまして、女性研究者が活躍できるような体制整備に積極的に取り組む機関を応援するような政策を考えたい。これは、国立大学が法人化して、それぞれの大学が色々な形で特色を活かして努力しておりますが、そういう中で、女性をむしる積極的に取り込むアイデアを競争していただく、というようなことで、良いアイデアに対して支援をしていく、ということを考えております。数字を申し上げられないのは予算が大変厳しいので、取れなかった場合には、私ちょっと来年ここに2度と来れないと思っておりますが、それは冗談として、非常に重要でございますので、全力を挙げて予算の獲得に努めたいという風に考えております。

ちょっと話は変わりますが、今回のシンポジウムのテーマにありますように、アカデミックキャリアパスを目指すということではなくて、やはり産業界における技術者、研究者、科学者の仕事を目指すというキャリアパスの多様化ということを考えていくのが非常に男女共同参画の中でもまた重要な問題であるというように考えております。たまたま先般、野口宇宙飛行士がディスカバリーで宇宙に行って帰られて日本で会合がありましたけれども、あのディスカバリー号の船長は、アイリーン・コリンズさんという皆さんもご存知の女性の船長です。研究者ではありませんけれども、当然、船長と言う重責を女性が担っているというようなことが非常に象徴的だなあと思った次第でございます。

それから、さきほども申し上げましたように、やはりキャリアパスの多様化、これは男性、女性に

限らず、多様化のための取り組み、それから社会のニーズに適應した人材の育成、こういった政策をきちんと進めていきたいという風に考えております。科学技術分野における男女共同参画という問題は、本当に皆様方のご努力で、非常に盛り上がりを見せていると言うように考えておまして、今、政府部内で検討中の来年の4月から始まります、第3期の科学技術基本計画においても、この男女共同参画を科学技術分野でどう考えるか、という問題は、非常に重要な柱になると考えております。特に、育児と研究の両立の支援などは重要でありますし、男女共同参画の基本計画の中でも、今、科学技術分野での重要性を取り上げられる方向で検討されておる、と伺っております。また、学術会議においても、提言もなされておりますので、文部科学省としては、内閣府の総合科学技術会議等ともよく連絡をしながら、政府全体として一丸となつてがんばって行きたいという風に考えております。

最後になりますけれども、この会を運営されました学協会の先生方、それから会場を提供していただいたお茶の水女子大学郷学長はじめ皆様に、改めて御礼を申し上げますと共に、関係の皆様のご更なるご発展を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。今日は、どうもおめでとうございます。

1-3-3 荒木由季子氏 (経済産業省 資源エネルギー庁新エネルギー対策課課長)



写真 1-6 荒木由季子氏
(資源エネルギー庁
新エネルギー対策課課長)

ご紹介いただきました、経済産業省の荒木でございます(写真 1-6)。本日、ここに何故呼ばれたかというのを、ご依頼を受けたときにふと考えました。私の現在の仕事は、新エネルギー対策課長ということで、新エネルギーの導入という施策をしているのですが、男女共同参画の施策をやっているわけでもございませんし、科学技術の方に関わっているわけでもないのですが、恐らく、産業界の方々との接点が多いということと、私が女性としてこれまで一応ウン十年くらい仕事をしてきたということもあって、個人的にお声がかかったのかな、と思っております。従いまして、組織を代表してご挨拶させていただくというよりは、個人の思いも含めて、第3回のシンポジウムのお祝いの意も含めて、挨拶させていただきたいと思っております。

科学技術分野での女性の活躍をどのように後押ししていくかということについては、色々な議論があるだろうと思っております。それは恐らく、科学技術あるいは産業界の話の中だけではなく、そもそも、広い意味での男女共同参画をどのように進めていくかという共通の課題もあるかと思っております。特に女性のライフスタイル、ライフサイクルに合わせて、それを仕事と上手くあわせていくということが非常に難しいという意味では、どの仕事に就こうと共通の課題であるかとは思いますが、今日は、私の若干個人的な話も含めて2つほど、女性が科学技術分野あるいは産業界で活躍していく上で、今後どういう風にしたらいいかということ、大変僣越ではございますが、お話をさせていただきたいと思っております。

一つは、数は力なりということだと思います。さきほど、日本化学会の村井会長から、理事の一つのポストを女性に割り当てたことに対して、アメリカから色んな話があったということでございましたけれども、いわゆるクォーター制のような形で、女性の比率の目標を決めてやっていくということについては、賛否両論ございます。もちろん男性の側からもいろいろございますが、女性の中でも特に若い方では、そういうやり方に対して反対のことをおっしゃる方もいらっしゃいます。あるいは、鶏と卵みたいなものであって、女性が少ないのはそもそも母体として女性が入ってこないからだ、そういう少ない女性の中で、理事とか、ある程度のポストを割り振るのはいかになものかという議論も当然あります。ただ、私の実感として、いろんな問題はあつたものの、クォーター制、あるいは目標でも良いけども、そういうものを掲げること自身が俄かに悪いことでは無いとは思っています。女性のその分野における活躍される方の数が増えていくということが、大変な力になるという風に思っています。と言いますのは、私自身工学部の出身でございますが、今は行政官でございますので、何ら科

学技術には貢献していないわけですが、工学部にいた時、当時、学部で一学年1000人いる学生のうち、女子学生は僅か8人でした。別に8人だからといって、何かが不便だったかという、トイレの数が少ないくらいで、勉強する上で特段、不便では無かったけれど、もっと数が居ると違ったのになあ、という思いを抱いたのは事実でございます。当然、就職する時にもそういう思いはございましたし、そういう意味では、女性の数が増えてくるということが大変大事なことでございます。そのために色んなことをやらなければいけないと思います。割り当てとか目標についてはいろいろな是非論があるかと思いますが、どういう風に女性の数を増やしていくか、要するに裾野を広げていくかということは、私も考えなければいけないと思っております。その中で、女性が科学技術に向いているかという話があります。私自身子供が2人おりまして、一人は男の子、一人は女の子です。私自身は男女の教育について、家庭のなかで、男女の区別無く育ててきたつもりですが、息子の方は古典・歴史などに興味があり、娘は理科系が好きです。これは、私が工学部だったからというわけでは全然無いと思います。子供を育てている実感として、男の子と女の子の興味は、特段男の子が工学、理科学的なものが好きで女の子が文系が好きというわけでは全く無いのだなあということを実感しました。ただ、この子供の興味がこれから、中学、高校、大学となっていくときにどれだけ、初期に持った自分の興味という物を発展させていけるのだろうかということ、私としては若干気にしております。というのは、笑い話ではありますが、私のアメリカ人の友人で、プラズマ工学を勉強していた女性があります。彼女とは、私がアメリカのMITに留学した時に親しくさせていただいて、いろんな話をさせていただいたのですが、彼女が言っていた面白いことで、やはりアメリカでもそうかなと思ったのですが、彼女が高校生のときに工学系に進みたいと言っていたのですが、理科系に進むのは女性にとって不利なのよね、と言うんですね。やっぱりアメリカでもそういうことはあるの？就職とか、と思ったら、そうではなくて、男性からデートに誘われにくい、声がかかりにくいというわけなんです。理工学を目指す女性というのは何となく怖いイメージがあるので、デートに誘われにくくなる。だから、女の子はみな、そういう難しいことはやらずに、何となく文学とか歴史とかそういうところに進んでしまうのよ、と彼女は言っていました。半分冗談だともおもいますが、そういう文化的な部分もあるかと思いますが、実際、個々の家庭の中でも、私も若干そういうことを言われたけれども、女性が理工学系に進むと言うことに関して、親なり親戚なりが、そんなところに進んでどうするの？嫁の貰い手が無くなるよみたいな話があるのは事実でございます。今やそんなことは無いと思いますけれど、そういう文化的な面も私はバカにできないと思います。そういう意味では、子供のもった自分の素朴な科学的な興味を、社会としてどれだけ育てられるかということも、私は関心を持っています。従いまして、さきほど、高校生の女子学生に対するいろんな支援という話もございましたけれども、やはり小学校のときから一貫して大学教育まで、どうやって、女性のそういった関心をエンカレッジできるかということが、私は大変大事だと思っております。

二つ目はリーダーシップの問題だと思っております。女性の社会参加、科学技術の分野にしる、産業界にしる、確かに最近、仕事を続けてがんばっておられる女性が多くなってきている。ただし、色んなデータから、意思決定に関わる立場におられる女性の数というのはやはり非常に少ない。多分、諸外国と比べても非常に少ないといわれていると思います。これも鶏と卵の関係で、女性にそれだけのことを任せられるのだろうかということをはっきりおっしゃられる方が大変多いのですけれど、私自身は、これは、先ほどの教育の話とも関わるのですが、女性に非常に早い時期からリーダーシップを発揮できる経験をどれだけさせられるかという、こういう社会をつくっていくことだという風に思っております。私自身は、実は中学・高校と女子高にいたのですが、アメリカでも女子大の役割というのが、私が留学した時非常に議論になっていたのですけれども、もう女子大の役割は無いんじゃないかと、そういう風に言われている中で、女性ばかりの中で、全て女性がやらなければならないということのなかで自ずと、リーダーシップが涵養されるという側面があるんじゃないかという議論があったのですけれども、私自身もそういうことがあったかなと思っております。やはり女性に対して、失敗しながらも何か重要な仕事、責任のある仕事・役割、こういうものをできるだけ早いうちから経験できるような環境を与えなければ、責任のある仕事をやれと言っても、中々難しいんじゃないかと思っております。従って、科学技術分野、あるいは産業界に於いてもですね、例えば、大学なら大学の学生のときから、企業であれば企業に入った時から、そういうチャンスというのをいかに女性に作

っていくかと言うことを、関係者の方には是非お願いしたいと思っております。私どものような行政官は、ある意味で言うと、国家公務員や地方公務員もそうかもしれませんが、公的な分野の立場の者として、基本的には均等な機会を与えられている、と言う風に思っておりますので、そういった意味で、いろんなチャンスを与えていただいて、当然失敗も沢山してきておりますけれども、そういった中で、色々な経験をして、私にリーダーシップがあるかどうかわかりませんが、そういう経験をする事の重要性を感じておりますので、早い時期から女性に対しても、科学技術分野でも、あるいは産業界でもリーダーシップを発揮できるような、あるいは経験できるようなチャンスを是非作っていただくことが大事だと思っております。ちょっと長くなりましたし、自分の思いがこもってしまいましたが、私としては、その2つを自分の経験の中から申し上げて、大変雑駁ではございますけれどもご挨拶とさせていただきます。最後に、このシンポジウムは3回目と伺っております。毎回毎回、こういった形で大変熱心に開催されていることに敬意を表したいと思っております。この開催にあたりましては、関係の方々の皆様方のご努力があったものと思っております。私も本当はこのシンポジウムを全部聞きたいところではあります。仕事の関係で残念ながら出来ませんが、是非、この結果については後からお話を伺って、私自身の仕事の中でできることをやっていきたいと思っております。本日は盛大なシンポジウムの開催、本当におめでとうございます。

1-4 歓迎の辞・発言要旨 郷 通子氏（お茶の水女子大学学長）



写真 1-7 郷 通子氏
（お茶の水女子大学学長）

みなさま、こんにちは。ようこそお茶の水女子大学にお越しくださいました。

先ほど来賓の方から、今日初めてこの大学に足を踏み入れて下さったというお話を伺いました。この大学は今年で130周年という大変古い歴史を持っていて、国が明治8年、最高の教育を女性にさせていただくために作ってくださった古い歴史のある大学でございます。しかし、女性が学長になりましたのは、私の前の本田学長が初めてでございます。私はこの4月から本田先生の後を継いで、女性としては2人目の学長でございます。そういう意味では、女子大でありながら今まで女性がトップに居なかったというちょっと不思議な所でございます。

これも、男女共同参画学協会連絡会のようなものができて、世の中の動きが男女共同参画という形に大きなうねりになって動き出してきたと言う中で、色々なところで、少しずつではありますけれども、女性が意思決定できる場所に沢山入るようになったのだらうと、私もその中の一人として、さきほど荒木課長からお言葉をいただきましたように、女子大学は一時生存の危機に瀕しましたが、法人化という新たな時代の流れの中で個性を発揮する、小さな大学でありながらも、それなりに光るものと言う形で、がんばって行きたいと思っております。先ほどリーダーを育てるためには、女子大というのは必要だとおっしゃっていただきまして、私も全く同じ思いであります。本学におきましては、社会のいろんな分野でリーダーシップをとれる人を、総力を挙げて養成していける仕組みを新たに作りたいと思っております。

歓迎の辞としてはちょっとどうかと思いますが、本学でこんなことをやっておりますということをご紹介して、女子大なので有る意味では当然やるべきこと、しかし中々そう簡単ではないけれどもやれることというのがありますので、もしかしたら本日この場にいらしている方々のそれぞれの機関で、こんなことだったらうちでもできるんじゃない？という風に思っていただけのことがあるかもしれませんので、少しこの場を借りて、ご紹介させていただきたいと思っております。

女性研究者の育成ということではいくつかありますが、特に一つご紹介したいと思っておりますのは、120周年記念桜蔭会国際交流奨励賞です。10年前に桜蔭会という同窓会からのご寄付をいただいて、

大学院生あるいはポストドクレベルの方に、海外の先端的な研究をしておられる方との共同研究をして貰うための奨学金という形で、最高200万円までで、1年とか長期間行っていただくための奨学金でございまして、額から言いましても大学としてはかなり大きなものを差し上げているのではないかと思います。

アフガニスタンの女性教育を振興するお手伝いを、5つの女子大学、奈良女子大学と、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学でコンソーシアムを作りまして、第1期3年が終わり、今は第2期5年の新しい契約を結びました。アフガニスタンの女性の方々をお迎えして、付属中学で研修なども行っております。

育児支援というのはどこの大学でも最近では始められていると思います。本学の中には保育園までございます。授乳室というのもございます。特徴としては、この4月から、大学院生で子どもの保育園に預けた人に保育料の半額の援助を、奨学金と言う形で始めました。ほかの大学では多分まだここまですべてなっていないと思います。これを学部まで広げて欲しいという声もありますが、今のところ財政上の問題で、大学院生にらせていただいています。それから、育児休業を取らない教員の方たち、つまり研究上のこととか、学生指導の関係でお子さん出産後も育児休業を取らない方には、授業、委員会などの大学の中の仕事を軽減させていただいております。具体的には非常勤講師の手当てをお付けしています。それは大学で費用負担しております。男性も女性も支援しておりますので、実際、男性の先生もこれを使っておられる方がございます。それから、非常勤職員の方の育児休業、それから介護休業もお取りしております。今のところ随分たくさんの方のことを、やれる限りのことを予算の許す中で、苦しい中ではございますけれど、支援をさせていただいております。

研究のことで2つほど。お茶の水女子大学は、21世紀COEに採択していただいております、その一つが、「誕生から死までの人間発達科学」でございまして。これは、乳幼児から老齢まで、発達心理学の立場から様々な問題を視野に入れた、特に女性の一生というものの、あるいは女性だけでなく生涯発達の追跡研究をしております。実際には幼児虐待の問題ですとかを、研究もしながらカウンセリングもやりながらと言う形で進めております。

もう一つの21世紀COEプログラムは、「ジェンダー研究のフロンティア」でございまして。これは男女共同参画社会の実現に向けていろいろな問題を発信していくと同時に、アジアを中心に、世界のジェンダー教育・研究の発展に資する拠点にしたいということでございまして。これから学際的に、科学や医療技術などの未開拓研究領域の開拓にも努めていきたいということで、一生懸命やっております。

次に女性教員の登用ということでございまして。本学は女子大学で、女性教員の割合は他の国立大学に比べると一番多いけれども、まだまだ色々問題がございまして。女性の教員の採用と言う点では、学位、業績ですとか能力が同じくらいだったら女性を優先するという取り決めがございまして。

それから、ロールモデルを学生さんたちに沢山見ていただくこと、名誉博士号を設けました。これは、世界的に著名な業績を上げた女性研究者や、卓越した女性リーダーを表しようということです。第1号が緒方貞子さんで、今まで国内外6名の方を出しております。

次は、女性支援の活動の一環で、企業など社会での女性リーダーとして育ててもらうための事業でございまして。キャリア支援に関する将来構想計画などの相談もしておりますし、人権侵害に対する対応も、一生懸命やっております。実は人権の問題というのは、付属学校でも色々課題がございまして、全学を挙げて大変な努力をさせていただいております。

女性教員の割合ですが、少し古いデータで、管理職は42%、講師以上の女性は38%です。今はもう少し上がっていると思います。全国平均16%と比べていただきましたらやはり多いと思いますが、私は、ゆくゆくは50%にしたいと思っております。全教員48%ありますのは、ポストドクの方

と助手の方も含めるとこの数字になります。講師以上の方が50%というのを、私は目標にしたいと思っております。事務職員の方は32%でこれもできれば50%になっていただきたい。国立大学として国から支援していただいている、奈良女子大学とお茶の水女子大学という2つの女子大学が、女性を育てていくためのモデル機関として色々試させて頂いていることを、他の機関の皆様方にもお役に立てるように、がんばって行きたいと思っております。

最後に、ご紹介を兼ねましてお時間をいただきましたけれども、今日はこの機会に、大勢の方々にこの大学をご覧いただくと言う意味でも、大変貴重な機会をいただきました。こういう機会には、これからまだまだいくらでも大学を使っていただきたいと思っております。場所的には、便利なところに思いますが、ちょっと奥の方に行ってくださいと、緑が多くて、都心にありますが少しほっとしていただけたところもございます。また色々な面でご示唆も頂きたいと思っておりますし、こういう場を使っていただければ、喜んでお手伝いしたいと思っております。今日はこれからまだ特別講演とか、大変大事なシンポジウムがあると思っておりますので、大変長くなって申し訳ございませんでした。今日はどうぞ、ごゆっくりとこの大学でお過ごしくださいと思いますように。どうもありがとうございました。

1-5 特別講演・講演要旨

1-5-1 全体報告

産業界における男女共同参画をテーマとして開催された第3回シンポジウムの特別講演では、産業界、行政、大学から3名の方にご講演いただいた。日本の男女共同参画の実態が諸外国と比べて非常に遅れた状況にあることを再認識させられながらも、それぞれの現場での積極的な取り組みに勇気づけられるご講演であった。

産業界からは、(株)資生堂 R&D 企画部学術室長の長沼雅子氏にご講演いただいた。はじめに入社から現在までをふり振り返り、写真を交えながらご自身の経験をお話くださった。創業100年を記念して企画された「光と皮膚のセミナー」で研究の面白さを知ったこと、育児期の苦労話、育児が一段落しての「ネパール肌調査」、そして現在ではかなり仕事中心の生活を送りながらも、休暇とのバランスもとっておられることなどである。育児については、「当時の未熟な支援制度の中でも仕事を継続できたことには、身近な先輩の存在が大きかった」と、ロールモデルの重要性を指摘された。現在の資生堂は、長沼氏が子育てをされた頃とは比較にならないほど充実した制度を導入して男女共同参画を進めている。それは単に支援制度を作るというだけでなく、制度を利用しやすくするための配慮もなされている。こうした取り組みは、「やりがいのある仕事と個人の充実した生活との良好なバランスが、人の大きなエネルギーの基となる」という考え方に基づいている。しかしまだ課題もあり、決定権を持つ立場にある女性は少なく、また育児休暇をとる男性も極少数とのことである。最後に会場からの質問に答え、女性社員の多い資生堂においても、より進んだ支援制度の導入には、下からの声だけでは限界があり、トップの決断によるところが大きいこと、そしてトップを動かすのは社会情勢(現代は社会貢献が企業評価の対象とされる時代)であると述べられた。

行政からは、内閣府男女共同参画局調査課長の塩満典子氏にご講演いただいた。塩満氏はまず豊富な統計資料を示しながら、日本の男女共同参画の現状を報告された。「女性の就業に関する意識」では、「子供ができてずっと職業を続ける方がよい」が、男女ともトップになるなど変化の兆しがみられる調査結果がある一方で、男性の約半数が固定的性別役割分担に賛成であり、1日あたりの家事育児時間は数十年前と変わらぬ30分程度、また育児休業取得率はわずか0.44%という状況である。また正規職員の割合、管理職割合、所得などいずれも女性は男性よりも低く、社会の中で男性が優遇されていると感じる人の割合は70%を越えている。大学進学率は、短大を含めれば男女差はほとんど無いが、大学院進学率では女性は男性の半分で、女性研究者の割合は11.6%と諸外国に比べて非常に低い。さらに理工農学系教授の女性比率はわずか数%であり、科学技術系分野では女性の3/4が男女で処遇に差があると感じている。こうした状況の改善にむけて国は、男女共同参画社会基本法に基づき、積極的な改善措置を含む施策を実行している。その主な手法が、数値目標と達成期限を定めた取り組

みである。その進展状況については、日本学術会議の女性比率が設定期限を待たずに目標を超えた一方で、なかなか進んでいない部分もある。塩満氏は、男女共同参画を推進して行く上で研究者、技術者が行なうべき大切なこととして、国民の科学技術に対する理解や関心を喚起するための努力をすること、また政策に関心をもち、具体的な提案や要望を積極的に行っていくことを強調された。

日本女子大学理学部教授の小舘香椎子氏は、産業会に人材を送り出す立場から、大学の役割についてお話をくださった。少子高齢化の時代を向かえた現在、社会では科学技術分野の人材に質、量ともに不足感があり、ここに多様な理工系女子学生の活躍の場が期待される。文科省のアンケート調査によれば、“なんとなく”研究者になろうと思った人はいない。そこには、科学技術に関心があった、社会貢献がしたかった、ロールモデルがいて科学者にあこがれたなど必ず理由あり、これは大学における人材育成のヒントとなる。その上で小舘氏は、大学の役割として、基礎学力はもとより実践力も備え、企業のインターンシップにも耐えうる人材の育成、また多様なロールモデルの育成とともに自らがロールモデルとなる自覚の育成、リーダーシップの育成、さらに産業会や地域社会などとの広いネットワークの形成などを挙げられた。日本女子大学や小舘研究室での具体的な取り組みも写真を交えて多数紹介された。中高生を対象にしたサマースクールの開催、中高生と大学院生との交流、出前授業、また企業や中・高・大学の教員が連携しての教材開発、各種展示会への研究成果の出展、他大学や研究機関との交流などである。こうした活動には“女性は科学にむかない”といった固定観念を払拭し、科学技術分野をめざす女性を増やすねらいがある。また学生にとっては、女子大学という枠を越えた広い視野に立って自らの将来を考える場となっている。写真に登場した学生さんたちの生き生きとした表情が印象的であった。

1-5-2 講演要旨 長沼雅子氏（株）資生堂 R&D 企画部学術室） テーマ：「働き続けられる職場から、ともに働きやすい職場へ」



今から 30 数年前、今でいう就職活動というのは理学部の女学生にとってはあまり縁の無いものでした。というのは、女性を公募している職場としては、各種公的研究機関を含めた公務員と教師位しかなかったからです。私企業では、教授のつても含めた縁故採用に頼っている状況でしたが、その時代にも既に資生堂は、理系女性を公募していました。

しかしながら、女性に期待されているのは、即戦力としての実験補助的な仕事でした。そして多くの同期入社の方は、結婚や出産を機に退社していきました。そんな中でも私（写真 1-8）がいた職場では、先輩の女性たちが結婚し出産し育児をしながら仕事を続けていました。産前産後の休暇や一般の休暇制度さえも今とは比べ物にならないくらい厳しい育児環境でした。しか

写真 1-8 長沼雅子氏
（資生堂 R&D 企画部学術室）

し一番の大敵、男性の目をかなり和らげてくれた先輩達のお陰で、それに続く私達は大層楽な目をさせていただきました。いつの世にも道を切り開くパイオニアがいて、徐々にではありますが状況は開けていくものと実感しています。誰も何も言わない・しない状況では進歩はありえないのです。

私が出産をしたときはと比べると職場の制度の充実振りは目を見張るばかりです。資生堂の制度について講演の中で紹介をさせていただきます。また就業しつづけるのが困難になるのは育児ばかりではなく、介護の必要が生じた時です。このような事態に対応しては介護休業制度もあります

1985 年の男女雇用機会均等法成立以後多くの女性研究員が活躍するようになり、研究所ではこれら制度が非常に活用されている状況で常に育児休業中の方が何人もいるまでになっています。出産を機に退職する必要が無いことは非常に喜ぶべき状態とは思いますが、現在の大きな問題は、育児休業を取る人は女性に限っているということです。全社的に見ても非常に珍しく、まだまだ男性にまで広がっているとはいいいがたい状況です。

仕事の中でも、研究業務は、それぞれ個人の創造性によるところが大きいことから、時間的制約は

比較的少ない職場だと思います（ただ部署によってはそうはいかないことも多々ありますが）。仕事を続けていくためには、自分は何ができるのか、何がしたいのかを見定める必要があると思います。これは女性ばかりでなく男性も同じ時代になってきつつあるのでしょう。とりあえず長く勤めればいいのか、専門的な仕事をしたいのか、管理的な仕事をしたいのかそれによっても仕事の仕方が違ってくでしょう。また企業のほうもそれぞれの働き方が選択できる、そしてそれは優劣の関係ではなく並列で選択できる制度をこれから整備していく必要があります。これからは、それぞれがよく考えて選択する時代になるのだと思います。

今後は、女性が出産した場合はもちろんのこと、男性でお子さんができた時にも、「育児休業を取るの？」と普通に聞ける時代になれば、また介護が必要な時も男女を問わず育児休業をとる時代になれば、新の意味での男女共同参画社会（仕事も育児も、そして介護も）ともに働きやすい職場になることでしょう。

そのためにできることは、まず自分から、そして自分の子供からかもしれません。

1-5-3 講演要旨 塩満典子氏（内閣府男女共同参画局） テーマ：「科学技術分野における男女共同参画～行政の立場から～」



写真 1-9 塩満典子氏
（内閣府男女共同参画局）

内閣府男女共同参画局では、男女共同参画社会の実現を目指し、平成 11 年 6 月に施行された「男女共同参画社会基本法」、本法に基づいて平成 12 年 12 月に閣議決定された男女共同参画基本計画、男女共同参画会議（議長：内閣官房長官）の意見等に沿って、関係省庁との連携のもと施策を講じている。

現行の男女共同参画基本計画に記される「具体的施策」は、第 2 期科学技術基本計画と同様に、平成 13 年度から 17 年度までの期間を対象としている。18 年度以降についての計画策定のため、昨年 7 月に内閣総理大臣より男女共同参画会議に諮問が行われ、同会議の下に設置された 2 つの専門調査会において検討が進められ、本年 7 月末、「男女共同参画基本計画改定に当たっての基本的な考え方」を示す答申が出された。本答申においては、現行計画の 11 の重要目標分野に加え、新しい分野として科学技術が加えられた。今後、本答申に基づき、基本計画改定案（政府案）が作成され、男女共同参画会議への諮問・答申の後、年末を目途に次期男女共同参画基本計画が閣議決定される予定である。

科学技術が男女共同参画を推進する新しい分野として注目された背景の一つに、男女共同参画学協会連絡会が 2 万件のアンケート回答結果をもとにまとめられた「21 世紀の多様化する科学技術研究者の理想像 男女共同参画推進のために」（平成 16 年 3 月）があると考えている。本報告書に描かれた男女の処遇差に関する研究者・技術者の意識、所属機関ごとの年齢による職位の推移、研究開発費の額及び部下の数、研究者の子育て状況等は、重要な示唆に富む。本年 5 月に閣議決定された平成 17 年版男女共同参画白書（特集テーマ：科学技術の進展と男女共同参画）のコラムにも紹介されている。また、昨年 10 月以降、男女共同参画学協会連絡会、日本分子生物学会、日本生物物理学会、日本女性科学者の会等の方々より貴重なご提案が提示されてきた。

現在、総合科学技術会議においても、基本政策専門調査会を中心に、第 3 期科学技術基本計画に係る検討が進められている。第 2 期科学技術基本計画においては、人材の活用と多様なキャリア・パスの開拓のため、「男女共同参画の観点から、女性の研究者への採用機会等の確保及び勤務環境の充実を促進する。特に、女性研究者が継続的に研究開発活動に従事できるよう、出産後職場に復帰するまでの期間の研究能力の維持を図るため、研究にかかわる在宅での活動を支援するとともに、期限を限ってポストや研究費を手当てするなど、出産後の研究開発活動への復帰を促進する方法を整備する」ことが定められている。少子高齢化の進展等に伴い、将来の科学技術を支える研究者の量的・質的不足が懸念されている状況の中、多様性の確保の観点からも、女性研究者の更なる活躍が求められてい

る。競争的研究資金制度の中では、日本学術振興会により研究者の育児と研究の両立支援のための措置が講じられ始めている。第3期計画においても更なる措置の充実が求められている。

男女共同参画社会基本法は、男女共同参画社会を、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」と定義している。また、基本法においては、5つの基本理念が定められている：男女の人権の尊重、社会における制度又は慣行についての配慮、政策等の立案及び決定への共同参画、家庭生活における活動と他の活動の両立、国際的協調。国は、これらの基本理念にのっとり、「積極的改善措置（ポジティブ・アクション）」を含む男女共同参画社会の形成の促進に関する施策を、総合的に策定し実施する責務を有している。地方公共団体も、国に準じた責務を有している。

ポジティブ・アクションには様々な手法があり、その一つに目標数値とその達成期限を掲げるゴール・アンド・タイムテーブル方式がある。この方式は、日本学術会議において採用されており、平成12年6月に、女性会員比率を今後10年間で10%まで高めるという目標値を設定することが提言され、第17期の1.0%が、18期に3.3%、19期に6.2%と増加した経緯がある。本年10月からの20期の比率はどのように変化し、目標値に近づくか注目される。

平成15年6月、男女共同参画推進本部（本部長：内閣総理大臣）は、「女性のチャレンジ支援策の推進に向けた意見」（男女共同参画会議意見（平成15年4月））に基づき、国連ナイロビ将来戦略勧告の目標数値等を踏まえ、「社会のあらゆる分野において、2020年までに、指導的地位に女性が占める割合が、少なくとも30%程度になるよう期待する。そのため、政府は民間に先行して積極的に女性の登用等に取り組むとともに、各分野においてそれぞれ目標数値と達成期限を定めた自主的な取組が進められることを奨励する」などのポジティブ・アクションを講じることを決定している。本年7月の男女共同参画会議の答申にも数値目標が盛り込まれた。

科学技術分野においても、男女がともに個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現に向けた動きが活発化している。今後の持続的発展が期待される。

1-5-4 講演要旨 小館香椎子氏（日本女子大学）

テーマ：「多様な理工系女性の育成- - 男女共同参画推進と大学の役割 - 」



写真 1-10 小館香椎子氏
（日本女子大学）

私達は現在、いつでも、どこでも、情報を共有できるユビキタス社会にくらしています。先端産業・技術をめぐる競争がますます激しくなる中で、蓄積された知識や技術のみでは対処できない課題をすでに数多く抱えています。このような21世紀のリスク社会では、確かな基礎知識と専門能力に加えて、従来型の発想とは異なる多様な価値観や豊かな感性を持つ知的生産性の高い人材の育成がより一層必要になっています。特に、学術研究で世界をリードすることを目指す大学や企業などの研究機関は、自らの主体的な工夫と努力によって、活力に富み競争力のある男女共同参画推進の組織作りを目指すことが重要です。そして、そのためには、学術研究の担い手として女性研究者を含め様々な人々が能力を発揮して活躍できる環境作りが何よりも大切です。このような状況をうけて、大学では以下の事柄を積極的にかつ地道に取り運び実現を目指す事が望まれているといえるでしょう。

1. 総合的な視点の育成（基礎学力、思考力を磨き、自らを高める努力、実験教育の充実）
2. 強靱な意思とチャレンジ精神の発揮（幅を広げる経験へのチャレンジなど）
3. インターンシップや産学官連携研究の推進（肉体的、精神的な競争への参加の覚悟、交流による広い視点の育成）
4. 女性のネットワークの形成（国内外の学会・研究会への参加の推進（旅費の援助）、理工系分野への高校生の勧誘（サマースクールの実施））
5. 多様なロールモデルの育成と提示（技術者・研究差・弁理士・教師・芸員など）

6. リーダーシップの育成（独立した研究テーマによる自立、独創性の育成）

私自身は、夢のレーザー光が実現した 1960 年代後半の、マイクロオプティクス黎明期からその基礎と開発、光の並列性を生かしたアナログコンピューティングによる顔画像認識システムの構築、フットネットワーク用機能デバイスの最近の研究に至るまで光技術のめざましい進展を経験し、楽しみながら今日までできました。大学で光学の基礎を学生に講義し、学園祭でホログラフィ実験を自主研究として指導する中で、探究心が啓発され、自信を養い、わくわくするような体験に出会うとき、また卒業研究で、産学連携研究の中でプロの研究者と思う存分意見交換ができるときに、自分が携わり拓いていけるテーマが沢山ある事を感じ、大学院へ、研究者の道へ、進む熱心で活発な女子学生達が確実に育っているのを実感しています。

1-6 パネル討論「産・官・学・男・女 - 真の共同参画社会を目指して」 のまとめ

司会：井上祥平（東京理科大学）

パネリスト：浅川智恵子（日本 IBM）

辻 篤子（朝日新聞）

館 かおる（お茶の水女子大学）



写真 1-11 井上祥平氏
（東京理科大）

グループが活動を開始しました。1971年に入社した技術系の内永ゆか子さんが、2004年4月に女性初の開発製造担当の取締役専務、執行役員となっています。私自身は視覚障害者支援関連のプロジェクトとして、点字ワープロソフト、ホームページリーダーの開発など、アクセシビリティを実現するための研究を続けてきました。企業において女性の技術者が少ないといわれています。徐々に職場環境の整備が行われてきていますが、その前の段階として理系に進む女子学生の数を増やすことが必要で、そのために技術系にいる女性の先輩として活動をしていかなければならないと感じています。女性のキャリアパスにとって重要なことはフレキシブルな職場環境、自分にあったフレキシブルな職場環境で働くことが最も重要ではありますが、同時にロングタームなビジョンを持って、自分自身でモチベーションを高めていくことが重要だと思います。

井上（写真 1-11）: 今回はパネリストの方が3人も女性だったので、男性一人、司会をすることになりました。3人の方には事前に「キャリアのために、進学、就職あるいは会社対応などのそれぞれの段階で、どの段階が一番重要と思われますか」ということを中心にお話いただきたいとお願いしました。まず自己紹介を含めて10分程度でパネリストの方にお話いただきたいと思います。

浅川（写真 1-12）: 1985年に専門女性研究者としてIBMに入社いたしました。以降、私は目が見えないのですが、さまざまな視覚障害者支援関連のプロジェクトに関わりまして20年になります。最初にIBMにおける男女共同参画活動に関する取り組みの歴史についてご紹介したいと思います。女性の参政権が認められる20年前の1899年に、3人の女性正社員を採用しています。さまざまな女性の活用が進められてきて、1998年にはウーマンテクノロジー（WIT）というグループ



写真 1-12 浅川智恵子氏
（日本 IBM）

辻 (写真 1-12): 私は大学では理科系に入学したのですが、科学者になる道を諦めて科学史科学哲学科に進み、79年に朝日新聞に入社しました。その後大体科学関連の道を歩んできました。その間科学ジャーナリストのためのプログラム参加、科学担当特派員として、アメリカで3年過ごしました。その間女子大の取材をして、アメリカは女性のトップの半分くらいは女子大出身だとかで、共学のところでは女性はなかなかリーダーになれない、リーダーを育てるのが女子大の使命だということを痛感しました。やはり女性はアメリカでも大変だと思いました。男女共同参画社会推進のために必要なことのトップは「男性の意識改革」であるという気がしています。まだまだ女性が出て行くことが特別であるという意識が色濃い。なぜ女性をもっと出て行かなければならないかということ国民意識までを変えていかないと、うまく進んで行かないのではないかと思います。



**写真1-12 辻 篤子氏
(朝日新聞)**



**写真 1-13 館かおる氏
(お茶の水女子大学
ジェンダー研究センター)**

館 (写真 1-13): お茶の水女子大学ジェンダー研究センターは、最初に1975年に「女性向け資料館」として設置され、その後女性文化研究センターを経て1996年に新たに設立されました。そこで「ジェンダーと科学技術」をテーマに研究を進めるプロジェクトを担当していますのが私です。お茶の水大学には女性で初めて博士号を取得した自然科学分野のさまざまな研究者がいるので、その資料を作成して研究しました。若い世代へのメッセージとして広く紹介し、モチベーションが高まったということも聞いています。次に「大学教育とジェンダー」ということで、大学における女性教員、女子学生の数について調査しました。そこで国立大学が今まで果たしてきた自然科学系の女性研究者の教育、学生の養成システムは非常に大事なものであることを改めて痛感しました。それでも、男女の違いが非常に顕著なのはやはり旧帝国大学系で、10校くらいが1割以上ですが、それ以外は1割以下というのがほとんど、女性教員が全然いないという大学もあります。また国際的にどのようにジェンダー研究が展開されているのかも調査しています。男女共同参画が科学技術政策のなかで位置づけられなければならない。ジェンダー支

援化政策は民主主義の要である。年齢差も含めて男女の差にかぎらず多様な知性を生み出す人材管理が大事であり、平等について配慮しなければならないであろう。

以上でパネラーの発言は終了し、続いて会場との質疑応答では以下のような意見が出された。
男性：「男性の意識の問題」で片づけるのは問題解決にはつながらないと思う。具体的に指摘して欲しい。
女性：意識の問題よりももっと大事なのは具体的な施策を行うことであると思う。
男性：女性は男性より10年長く生きますので、女性の定年を10年長くするとよいと思う。
女性：社会全体を少しずつ変えていかないと、意識のレベルまで変えていくのは難しいと思います。

1-7 連絡会活動報告 相馬芳枝氏 (男女共同参画学協会連絡会委員長)

第3期は、日本原子力学会と日本化学会が幹事学会を仰せつかりました。第1期幹事学会(応用物理学会、小館香椎子委員長)のリーダーシップにより、大規模なアンケート「科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」が行われ、これを受けて、第2期幹事学会(日本物理



写真 1-14 相馬芳枝氏
(連絡会委員長)

学会、坂東昌子委員長)が、男女共同参画をすすめるために2種類の提言をまとめておられる時期に引継ぎが行われました。2つの提言、すなわち「科学技術研究者に適した育児支援制度の整備に関する提言」は、昨年の2周年記念シンポジウム(10月7日)で承認され、「研究助成への申請枠拡大に関する提言」は11月9日の運営委員会で承認されました。

私達は、2種類の提言を約400の政府関係機関、大学、研究機関、財団等に送るとともに、内閣府、文部科学省、経済産業省、農林水産省、厚生労働省等の男女共同参画推進担当者のところへ、直接に説明しに行きました。折りしも、第3期科学技術基本計画の策定が進行中でしたので、担当の方から第3期科学技術基本計画に反映させられるような行動をするように、アドバイスをいただきました。そこで、連絡会では「第3期科学技術基本計画に関する要望 男女共同参画社会実現のために」という要望書を4月末にまとめて、内閣府に提出しました。更に、

内閣府からの質問に応じて、女性研究者を増やす施策のバックデータとして52学協会の会員の女性比率調査結果と、女性研究者が増えた成功事例として国立遺伝学研究所のまとめを内閣府に提出しました。この女性比率調査は、日本分子生物学会の大坪久子先生の主導により行われたもので、生物系学会では女性比率が高いこと、どの学問分野においても学生会員の女性比率は、一般会員に比べて高いことが明らかになりました。この調査は、第3期連絡会の特筆すべきものであり、一般会員の女性比率が少ない分野では、女子学生がプロの研究者となる道を阻害する要因を解析する必要があることが指摘されております。

文部科学省の平成18年度概算要求に、出産、育児等による研究中断からの復帰支援等、女性研究者の活躍を促進するための予算措置が盛り込まれており、連絡会の要望が生かされていることを感じます。今後、女性研究者・技術者が働きやすい環境整備が進み、女性研究者・技術者が増えることを切望します。

今まで、文部科学省「学校基本調査」、国立大学協会調査書をはじめとして女性研究者に関する調査報告は沢山ありますが、その多くが大学関係者を対象としており、数の面で過半数を占めている産業界の女性科学者・技術者の実態が十分に把握されておりません。そこで、今期は産業界の女性科学者・技術者にも光をあてた活動をするにこし、産業界の女性科学者・技術者に関する勉強会を2回開催しました(講師:吉祥瑞枝氏、森 義仁氏)。本日の第三回シンポジウムでも、産業界の女性科学者・技術者を中心テーマにしております。また、女性にもリーダーシップが必要であるということで、元文部大臣赤松良子先生をお招きし、「女性とリーダーシップ」という勉強会を行いました。

現在の日本では、残念ながら理工系の女性科学者・技術者が少ないというのが実情であり、理工系の女性科学者を増やし、育てる種々の施策、啓蒙活動が必要であります。内閣府男女共同参画局で、理工系の女子学生を増やすチャレンジ・キャンペーンが行われているのは嬉しいことです。連絡会関係では、日本物理学会の鳥養映子先生のリーダーシップのもとに、女子高校生を理工系にいざなうための「女子高校生夏の学校」が始めての試みとして開催され(国立女子教育会館、8月22, 23日)、大成功をおさめました。関係者から、来年以降、この試みを拡大したいという要望が既に出ております。

更に、女性研究者が正当に評価され、昇進すると同時に、各種の委員、審査員等に登用されることも重要であります。丁度、今年日本学術会議が改革を行う年であり、会員候補者選考委員会から各学協会に対する「会員候補者に関する情報提供について」という依頼書の中で、30%の女性を含めるようにという要望が示されておりました。これに呼応して、28の自然科学系有志学協会から会員候補者選考委員会へ「なるべく多くの女性会員を選出してほしい」という主旨の要望書を提出しました。

また、日本学術会議の改革に伴って、連絡会への入会資格を変更する必要が生じたことと、運営委員会の位置づけを明記するために、本会の規約を改訂しました。

男女共同参画推進の活動は、各学協会でもシンポジウムや各種の催しを通じて着実に進んでおり、現

在、連絡会加盟学協会は 47 に達しております（正式加盟：27、オブザーバー：20）。特に、日本分子生物学会、日本生物物理学会、日本女性科学者の会でそれぞれに、更に進んだ内容の提言をまとめられたことは注目に値します。

男女共同参画基本計画（平成 12 年に閣議決定）は、今年、改定作業が進められており、連絡会のメンバーも各地の公聴会へ参加し、意見を出しました。科学技術分野における男女共同参画は、新たな取り組みを必要とするものとして位置づけられており、科学技術分野の男女共同参画が進むことを願わずにはおられません。

第 4 期は、女性比率が高く、女性研究者の活躍が著しい日本分子生物学会（大隅典子委員長）が幹事をされることになっており、4 番打者としての本格的なご指導のもとに連絡会の活動が躍進することを期待いたします。

最後に、ご指導いただきました内閣府男女共同参画局の塩満典子調査課長、および微力な委員長にご協力いただきました運営委員会の皆様には厚くお礼申し上げます。また、本日のシンポジウムの企画、準備にご尽力いただきました皆様、会場をご提供いただきましたお茶の水女子大学の関係各位に心より感謝申し上げます。

1-8 閉会挨拶・発言要旨 芹澤昭示氏（日本原子力学会会長）



写真 1-15 芹澤昭示氏
（日本原子力学会会長）

本日はご多忙の中、本シンポジウムにご参加いただきまして、誠に有難うございます。男女共同参画学協会連絡会副幹事学会であります日本原子力学会を代表いたしまして御礼を申し上げます。

原子力学会は、原子力分野における学術的貢献はもちろんのこと、原子力と社会を結ぶ役割も大切な使命であり、特にその面で女性の果たす役割は非常に大きなものがあります。女性と男性が共に個性と能力を発揮できる環境作りに皆様と共に大いに貢献したいと考えています。

私自身（写真 1-15）は本日のシンポジウムには途中参加のため、午前中のプログラムには出席できませんでしたが、実りのある討論がなされたものと確信しております。午後にご来賓の方々にはご挨拶を賜り、また特別講演、そしてパネル討論など、関係された多くの方々のご努力、そしてお世話いただきました日本化学会の皆様方にも深く感謝申し上げます。

先日、中国に出張した折、空港内の至るところに「男女平等は中国の基本的な国策である」という大きな看板を見かけました。是は 1995 年に北京で「第 4 回国連世界女性会議 平等・開発・平和のための行動」が開催されたのを契機に「男女平等を社会発展のための基本国策とする」ことが決まったそうです。今年は丁度 10 周年に相当し、全国キャンペーンが行われているということのようです。

我が国におきましては平成 11 年に「男女共同参画社会基本法」が公布／施行され、さらには平成 12 年に「男女共同参画基本計画」が閣議決定され、男女共同参画が我が国社会の重要課題と位置づけられてから、既に 6 年余り経過しております。其の重要性に対する理解が徐々に広がりつつありますが、一般の方々がそのような国の施策を知っているかという大変疑問に思っています。中国と日本では社会事情も大きく異なり、また「男女共同参画」と「男女平等」は似て非なる思想ですが、女性の社会での在り方について国を挙げて積極的に取り組んでいる姿勢には学ぶべきものがあります。

何れに致しましても、男性、女性がそれぞれの持ち味を十分発揮し、様々な視点から科学技術へア

プローチをすることが、日本の科学技術の発展には必要と認識しております。今後とも男女共同参画活動が一層活性化し、「男女共同参画」という言葉自身を意識しない日が来ることを願うものであります。皆様の一層のご支援をお願いいたす次第です。大変簡単ですが、これをもちまして閉会のご挨拶とさせていただきます。

1-9 ポスター発表写真集及びポスター賞

ポスター展示は、本シンポジウムの会場となったお茶の水女子大学・理学部3号館1階廊下を利用して行われ、各学協会の男女共同参画への取り組み状況について報告がなされた。写真1-16にポスター展示の様子を示す。各学協会のポスターとも写真やグラフを多用し、活発に行われている様々な取り組みについて分かりやすく伝えようとするものが多かった。また、ポスター前で熱心に説明を受ける姿も多く見られた。



写真 1-16 ポスター展示の様子

ポスター賞は日本数学会の織田孝幸氏を選考委員長として選出され、その結果は以下の通りである。

最優秀賞：日本分子生物学会
優秀賞：日本女性技術者フォーラム、日本化学会
ビジュアル賞：日本動物学会
ユニーク賞：日本電子情報通信学会
ユーモア賞：日本生理学会

1-10 懇親会・写真集



また来年元気にお会いしましょう！

2 第3回シンポジウムWGメンバー

委員名		所属学協会	所属
井上祥平	主査	日本化学会	東京理科大学工学部
五明明子		応用物理学会	NEC中央研究所
近藤高志		応用物理学会	東京大学工学部
遠山嘉一		応用物理学会	富士通
伊藤香代子	オブザーバー	応用物理学会	学会事務局
土井美和子		電子情報通信学会	東芝
吉祥瑞枝		日本女性科学者の会	東邦大学大学院理学研究科
大住千栄子		日本分子生物学会	味の素ライフサイエンス研
大坪久子	オブザーバー	日本分子生物学会	東京大学分子細胞生物学研究所
中鶴陽子	オブザーバー	日本分子生物学会	萬有製薬つくば研究所
浜 祐子	オブザーバー	日本分子生物学会	旭硝子ASPEX事業推進部
小川順子		日本原子力学会	日本原子力発電
大澤京子		日本原子力学会	学会事務局
小川温子		日本化学会	お茶の水女子大学大学院
馬場由佳		日本化学会	三菱化学
森義仁		日本化学会	お茶の水女子大学理学部
佐藤美登里		日本化学会	学会事務局

[本報告書の著作権に関する注意]

1. 内容を転載する場合は、男女共同参画連絡会の承認をとること
2. 転載内容については、連絡会の資料であることを明記すること

男女共同参画学協会連絡会 第3回シンポジウム報告書
 ©男女共同参画学協会連絡会